ボランティアグループによる高齢者施設での音楽活動・20年

遠藤紀子（ボランティアグループ　アリサの会）

【対象者および目標】

Ｎ市旧市街の中央部に位置するＨ地区。地元の高齢者施設（通所）の利用者を対象に、活動を開始し20年となる。当ボランティアグループ（以下Gとする）の歩みを振り返り、地域の中で育つ音楽療法として報告する。Gは、子どものいるグループから出発し現在は中高年者のみとなった。

最初から目標としたのは、①音楽を基にする　②長く続ける　③世代間交流を取り入れる　④地域につながるである。本レポートでは②の〔継続〕を柱に、主に③④の〔交流〕をまとめた。

【方法】

「老人デイサービスセンター　Ｋ」に通う高齢者16人程度。平均年齢概ね88歳。平成11年１月～平成31年３月　全173回（月１回程度目安）午後の約45分間。施設のホール、扇形配置。セラピスト１、ピアニスト１、Gスタッフ３。流れは、簡単な体操→合唱→合奏や踊り→鑑賞（エンディング）。毎回の記録、活動見直しで実施したインタビュー（事例）及びアンケートを分析した。

【経過および結果】

ボランティアグループ　経過（毎回の記録から）

Ⅰ平成11年開始	10年間	小学生児童・兄弟・母親の母子5組。現代詩朗読や皆と歌う曲の開始。
Ⅱ平成21年～27年	7年間	子が離れ、大人2～３人で実施。歌う曲を工夫し折々にテーマを設定。
Ⅲ平成28年～現在	３年間	メンバーが増加。新しい楽器に取り組み、各回テーマや役割分担を強化。

事例Ａと事例Ｂ　参加状況（記録と利用者インタビューから　インタビュー：𠮟29年３月実施）

Ａ：102歳女性、参加約20年。開始時は夫婦で参加、現在は一人。片麻痺。Gを見守る様子。詩が好きで、朗読時は常に聴き入る。インタビュー：言葉が出ず「いろいろあるんだけど、、、」ともどかしそう。
Ｂ：84歳女性、参加9年。身体の痛みに「やってると忘れる」。席は中央で、Gメンバーを支える。

活動評価アンケート　及び　Gメンバー意見（平成29年３月・４月実施）

対象者アンケート：感想は？…大変良い8、よい6、普通１、やや悪い0、悪い0　今後も参加したい？…はい15、いいえ0　（全部楽しかった・皆で合奏を奏でたい・年寄りは口では言わないがありがたい）
職員アンケート：感想は？…大変良い４、よい１、普通１、やや悪い0、悪い0　（構成がしっかりしていて状態や興味で楽しめる・動と静の組み合わせ、楽器が良い・語りかけて音楽が加わり気持ちが伝わる）
Gメンバー意見：・形が決めてあると新入者が入り易い・待っていてくれるのが何より・45分のセッションが、「音楽の豊かさ」と思う・“何か”を貰いに行く感じ、エンディングで不思議な幸せを感じる

【考察】

活動内容はおおむね好評で、期待されている様子がある。対象者とGメンバーが互いに顔見知りとなり、音楽を楽しみ時間を共有することで、気持ちが繋がる。地域の先輩でもある対象者は、Gの子らの成長や活動見直しなどによる変化を見守り、セッションに主体的に係わってGを成長させる。ボランティアという自主的で無償の関係性の中で対象者に受け止められ、柔らかな交流と親しみを生んでいる。施設は活動を理解し受け止め、相互の協力が有る。Gメンバーは、やりがいを感じてそれぞれの技能を向上させた。ささやかな成果ではあるが、コミュニティ音楽療法として音楽と継続の力を感じている。課題として、資金とG運営の問題がある。地域・施設・対象者の特徴および活動で築いたG特性を生かしながら、考え続けたい。